

## 目次

まえがき	iii
第1章 AIと対話	中島秀之 1
第2章 丁寧表現形式「デス」の地域差 —日本語諸方言コーパス (COJADS) から—	木部暢子 15
第3章 対人配慮の歴史をどう捉えるか —『平家物語』の〈受諾〉〈断り〉表現をめぐる—	高山善行 37
第4章 書き言葉・話し言葉における縮約形の実態 —コーパスに基づく分析を通して—	小磯花絵 61
第5章 ハワイとカリフォルニアに渡った日本人女性たちによる 敬語と女性文末詞	朝日祥之 79
第6章 日本語学習者の配慮の表現・行動から出発する コミュニケーションの対照研究	野田尚史 101

第7章

日本語学習者のフィラーの習得と評価

—中国語を母語とする日本語学習者3名を対象にしたケーススタディー—  
.....石黒 圭 123

第8章

自閉スペクトラム症の言語コミュニケーション.....藤野 博 145

第9章

NPCMJを用いた文構造の出現頻度に関する調査

—主語省略文と受身文を例に—  
.....プラシャント・パルデシ、長崎 郁 167

第10章

プロソディーの多様性と音声コミュニケーション.....窪園晴夫 183

索引.....205

編者・執筆者紹介.....207

## まえがき

本書は2020年10月3日に開催された国立国語研究所主催のNINJALシンポジウム「言語コミュニケーションの多様性」の成果をまとめたものである。このイベントは2016年4月に始まった第3期中期計画における国立国語研究所の研究成果を「コミュニケーションの多様性」という視点からまとめたものであり、中島秀之氏の基調講演「AIと対話」と、「配慮の表現・行動から見るコミュニケーションの諸相」および「コミュニケーションの諸相」と題する2つのワークショップから成っていた。本書はこのシンポジウムの構造に忠実に従って構成されている。

中島氏の論考は「AI and 対話」と「AIを相手として対話する」の2つの視点からAI研究の歴史と現状を検討し、人間とAIシステムの違いを解説したものである。続く5つの論考は、国立国語研究所が構築してきた方言コーパス、歴史コーパス、日常会話コーパス、学習者コーパス、在外資料など言語資源を活用して、配慮の表現・行動の観点からコミュニケーションの実態を探り、そこに潜む問題点を検討している。

後半の4つの論考は、「健常な成人の母語話者によるコミュニケーション」を対象にした旧来のコミュニケーション研究から、外国語として日本語を学ぶ人（日本語学習者）や障害を持つ人、さらには外国語との比較などに視点を広げ、言語とコミュニケーションの関係を考察したものである。

本書の刊行を通じて、言語とコミュニケーションの研究がさらに深まることを期待したい。

最後に、上記シンポジウムの開催に尽力された方々と、本書の編集に協力してくださった溝口愛、高城隆一、甲賀真広の3氏にこの場を借りてお礼を申し上げる。

2021年8月

編者 窪菌晴夫

朝日祥之

## 第 1 章

---

# AI と対話

中島秀之

### 1. はじめに

表題には「AI についてと、対話について」という意味と「AI との対話」という二つの意味を持たせてある。後者は人間との対話を想定した AI プログラムの構成手法のことである。

AI とは構成的学問体系である。知能にまつわる現象を記述するのではなく、その現象をプログラムとして実装することが求められている。本章では対話をテーマとして AI の構成的側面を浮き彫りにしたい。なお、ここでは人間同士の対話自体を深く掘り下げることはしない。知能を構成的に研究することの例示として、状況理論に基づく（機械的な）対話のデザインを示し、それを実装したプロトタイプについて述べる。

以下では、まず AI とは何かということについて簡単に説明する。AI の流れの一つに環境との相互作用の重視がある。それについて説明した後、状況依存性の観点から日本語の特徴を考える。特に日本語の持つ「視点」の特徴を採り上げる。その後、それらを反映した対話のモデルを示し、その実装経験について簡単に述べる。

## 第2章

---

# 丁寧表現形式「デス」の地域差

—日本語諸方言コーパス (COJADS) から—

木部暢子

### 1. はじめに

本章では、聞き手に対する配慮表現のうち丁寧表現形式「デス」を取り上げ、その用法に以下のような地域差があることについて述べる。

1. 現代共通語の丁寧表現は、名詞述語では「です」、動詞述語では「ます」、形容詞述語では「ございます」「です」によって行われる。それに対し諸方言では、デスが動詞述語にも使われる。例えば、スルデス (する-デス)、シタデス (した-デス)。また、シマスデス、シマシタデスのようにマスやマシタにデスが接続することもある。諸方言ではデスが名詞述語の丁寧形式の枠を超えて、丁寧をあらわす表現形式へと用法を拡大している。拡大の様相は方言によって違いがある。
2. 方言ではデス、マスによらず、文末詞で丁寧を表現することがある。その一例として、佐賀市方言の～ンタ系文末詞による丁寧表現のシステムを見る。

## 第3章

# 対人配慮の歴史をどう捉えるか

## — 『平家物語』の〈受諾〉〈断り〉表現をめぐって—

高山善行

### 1. はじめに

配慮表現の歴史的研究は開拓期にあり、分析方法を模索しながら記述を積み重ねていく段階にある。本章では、『平家物語』の断り表現に焦点を当てて、中世語の対人配慮の実態について調査分析を行う。2節では研究史を概観し、3節では方法と資料について説明する。今回は、『平家物語』を資料として用い、中世語の実態を記述分析する。この節では、資料の特性、〈受諾〉〈断り〉の認定について述べる。4節では、談話展開の観点から〈受諾〉〈断り〉を動的に捉えてみる。5節ではモダリティ表現に光を当てて、〈意志〉と〈可能〉の対立と対人配慮の関係について述べる。6節では、本章のまとめと今後の課題について述べる。

本章では、以下の(1)～(3)を主張する。

- (1) 〈受諾〉と〈断り〉は依頼の実行／非実行の面に対立するが、テキストにおいては、発話の省略可能性等の点で非対称性が認められる。
- (2) 『平家物語』の談話展開において、〈受諾〉〈断り〉を動的に捉えると、〈断り〉を撤回したあとで〈受諾〉するパターンが目立つ。こ

## 第4章

# 書き言葉・話し言葉における縮約形の実態

## —コーパスに基づく分析を通して—

小磯花絵

### 1. はじめに

対人コミュニケーションにおいては、相手との関係性を良好に保つために、親近性などに配慮して適切な表現を選択することが求められる。家族や親しい友人に常に改まった口調で話しかけることは、相手によそよそしい印象を与えることにつながりうる。逆に初対面の取引先を相手にくださったスタイルを選択することも、相応しい行為とは言えないだろう。こうした場に応じた言葉の適切な選択は、音声を介した対面コミュニケーションに限られるものではなく、書き言葉を含むコミュニケーション一般に言えることである。しかし、一概にくださった口調や文体、改まった口調や文体といっても、その実態は十分には明らかになっていないのが現状である。

この問題を探る一つの方法は、多様な種類のデータを対象とするコーパスを活用することである。国立国語研究所ではこれまで、現代日本語の書き言葉の全体像を把握するために多様なジャンルの書き言葉を集めた『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』(Maekawa et al. 2014) や、講演 (独話) を中心とする話し言葉を集めた『日本語話し言葉コーパス (CSJ)』(国立国語研究所 2006) を構築、公開してきたが、我々の言語使用の実態を明らか

## 第5章

---

# ハワイとカリフォルニアに渡った日本人 女性たちによる敬語と女性文末詞

朝日祥之

### 1. はじめに

本章では、20世紀初頭に日本からハワイとカリフォルニアに写真花嫁として渡った日本人女性による日本語口述資料を用いた分析を敬語、女性文末詞を事例として行う。アメリカの日系社会の日本語研究は1960年代後半から着手されるようになった(安倍1965, Reinecke 1969, 井上1971, 比嘉1974a等)。その頃にはすでに日本から現地に渡った一世たちの高齢化が進み、現地で生まれた二世の言語シフトも進んでいた。もちろん、二世の中には、日本語運用能力の高い話者も少なくない。だが、その日本語には英語からの干渉や、コード切り替えなども観察される点で、一世の日本語とはその性格が大きく異なる。そのため、一世らが使用していた日本語は、その当時、現地での聞き取りによる日本語記述に基づいた研究論文、一世らによる作文や日記資料などに頼らざるを得ない状況にあった。

日系社会の日本語研究が始まった時期は、ちょうどオーラルヒストリー研究が確立した時期でもあった。話者による口述資料に基づいた社会史、生活史の研究が本格化した。当然、日系アメリカ人を対象とした調査もアメリカ各地で行われた。幸いなことに、その調査の補助手段として録音がされたの

## 第6章

---

# 日本語学習者の配慮の表現・行動から 出発するコミュニケーションの対照研究

野田尚史

### 1. 本章の目的と構成

本章の目的は、日本語を母語としない日本語学習者と日本語を母語とする日本語母語話者で配慮の表現・行動が違う事例から出発して、日本語と他言語のコミュニケーションの対照研究を行うことを提案することである。具体的には、そのような対照研究で有意義な結果が得られる可能性があるテーマを提案する。

日本語と他言語の対照研究は、これまでは言語の構造にかかわるものが多く、言語の運用であるコミュニケーションにかかわるものは少なかった。日本語学習者と日本語母語話者で配慮の表現・行動が違う事例をもとに日本語と他言語の共通点と相違点を予測しながら対照研究を行うようにすれば、新しい研究を展開できる可能性が十分にある。

たとえば、中国語を母語とする日本語学習者が、隣の席に座っている友だちがテーブルの上に置いているペンを無言で借りて使い、無言で返すことがある。これは、親しい友だちにペンを借りる許可を求めたり、ペンを貸してもらったお礼を言ったりするのは水臭いと思い、親しさを表すために軽いことで感謝や謝罪をしないという配慮をしているのだと考えられる。しかし、

## 第 7 章

# 日本語学習者のフィラーの習得と評価

## —中国語を母語とする日本語学習者 3 名を対象にした ケーススタディー—

石黒 圭

### 1. はじめに

21 世紀に入り、外国人、厳密には日本語を母語としない話者の日本語に接する機会が増えている。そうした状況の背景には、日本で暮らす在留外国人の増加があり、法務省の統計によれば、1991 年当時は 122 万人弱であったその数が世紀をまたぐ前後に急増し、2019 年末には 293 万人強に達している。

そうした在留外国人の話す日本語は総じて流暢であるが、それにしばしば違和感を与える要因にフィラーがある。話されている言葉は日本語なのに、間に外国語のフィラーが入ると、耳慣れない音に日本人の耳は拒絶反応を示しがちである。しかし、文法やアクセントの不自然さのような、意味理解の妨げとなる要因に比べ、意味理解に直接関わらないフィラーの不自然さを対象にした研究は遅れているのが現状である。

そこで、本章では、日本語学習者数でも在留外国人数でも最多を占める中国語を母語とする学習者を対象に、次の二つの研究課題を設定した。

- (1) a. 中国語を母語とする日本語学習者がフィラーをどのように習得していくのか、その発達段階を明らかにする。

## 第 8 章

# 自閉スペクトラム症の 言語コミュニケーション

藤野 博

### 1. 自閉スペクトラム症と言語コミュニケーションの特徴

本章では、発達障害の一種である自閉スペクトラム症に焦点を当て、言語コミュニケーションの問題について主に語用論的な側面から概観し、認知特性との関連について検討する。そして、筆者らが行った研究を紹介する。

#### 1.1 自閉スペクトラム症の診断基準

自閉症は言語コミュニケーションに特異的な問題を示す発達障害の一種である。精神医学の診断基準である DSM (精神障害の診断と統計マニュアル) の第 5 版では「自閉スペクトラム症 (Autism Spectrum Disorder: ASD)」という名称で記載されており (American Psychiatric Association 2014)、表 1 のように診断基準が示されている。

## 第9章

# NPCMJを用いた 文構造の出現頻度に関する調査

## —主語省略文と受身文を例に—

プラシャント・パルデシ、長崎 郁

### 1. はじめに

本章は、これまでの研究において世界の諸言語、特に英語と対照した場合の日本語のコミュニケーション上の特徴とされてきた文法現象の中から主語省略文と受身文を取りあげ、NINJAL Parsed Corpus of Modern Japanese (NPCMJ) を利用して量的な観点から分析し、その使用実態を明らかにすることを目的とする。

NPCMJは国立国語研究所共同研究プロジェクト「統語・意味解析コーパスの開発と言語研究」が構築を進めている統語・意味解析情報付きの現代日本語コーパス(ツリーバンク)であり、2021年3月現在、67,018文(764,266語)のデータが、複数のオンライン検索インターフェースとともに無償公開されている。NPCMJのデータには、さまざまな構文(受身文、使役文など)、文法役割(主語、目的語、受身文の論理的主語など)、従属節の下位分類(名詞修飾節、副詞節など)、空範疇(ゼロ代名詞や関係節のトレースなど)といった統語・意味情報が付与されている(吉本他2013、バトラー他2016、ホーン他2020)。そして、これらの情報を検索式に組み込むことによって高度で柔軟な検索ができる。また、検索結果をダウンロードし、より

## 第 10 章

---

# プロソディーの多様性と 音声コミュニケーション

窪菌晴夫

### 1. はじめに

言語が存在する第一の目的は、人と人とのコミュニケーション(意思伝達)である。その一方で言語は変化し、その結果生じた多様性 (diversity) がしばしばコミュニケーションの障害となる。本章ではアクセント(語レベルの音調)やイントネーション(文レベルの音調)などのプロソディー (prosody) が音声言語において見せる振る舞いをもとに、言語が持つ二面性—コミュニケーションという機能と多様性という性格—を考察する。具体的にはプロソディーが音声言語において重要な役割を果たす一方で、その多様性がコミュニケーションを妨げる一因となっていることを示し、そこから言語とコミュニケーションの関係を探る。

### 2. アクセントの働き

#### 2.1 同音異義語とアクセント

語 (word) のレベルでプロソディーが果たす重要な役割の1つは語の曖昧性を解消してくれることである。たとえば(1)の各語は分節音の連続としては曖昧で、ame という音の連続であれば「雨」と「飴」を指すことができ